

## 「MSW という仕事～バイステックの 7 原則から再考する～」

高名 祐美

その方は、40代の女性。小学校の教員をされていました。直腸がんを患って、抗がん剤の治療を受けながら仕事は続けていました。小学生の子供さんが二人。ご主人との4人暮らしでした。

私に関わることになったのは、Aさんの残りの人生が少なくなった頃。緩和ケアのNsを通じて出会いました。Aさんがまだ若く、学齢期の子供を抱えていること、経済的な不安も時折口にされるとのことで介入依頼がありました。しかし、Aさん自身はどこか楽観的なところもあり、差し迫って自分自身の生活における課題を相談してくるという姿勢ではありませんでした。

しかし、緩和ケアNsが折をみてはMSWの存在を伝え、「一度話をしてみてもどうか」とAさんとAさんのご主人に話をしていました。

病状も進行し、日常生活にも支障がでてきましたが、Aさんは「家にいたい。息子の入学式にはなんとかしてでも出席したい」と主治医からすすめられた入院を拒んでいました。訪問看護の利用も提案しましたが、「大丈夫」と。歩行もままならない状態になり、ご主人より「車いすを貸してもらえないか」という相談が緩和ケアNsにありました。それは、息子さんの入学式に参列

するためでした。Aさんたちのほうから主体的に何かを訴えてこられたのは、これが初めてのことでした。面倒な手続きを踏む時間はないと判断し、外来看護師長と相談し、病院の車いすを貸し出すことにしました。借用書を作成し、ご主人に署名捺印してもらうことで、病院から車いすを貸出し。その際に、Aさん・ご主人にMSWの存在を説明することがようやくできました。初めてお会いしたAさん。ご主人の車の助手席で、穏やかな表情を私に向けてくれました。

無事に入学式を終えたあと、いよいよ具合が悪くなり入院となりました。入院後、主治医からの病状説明にMSWとして私は同席しました。顔合わせができていたので、自然な形で同席することができました。

主治医の説明は、厳しい内容でした。「今まで治療を頑張って受けてもらってきたが、残念ながらよくなっていない。肝臓が腫れて、胃が押しつぶされている。それでもものが食べられない。胸に水も溜まっている。下肢のむくみもひどい。今の状態を根本的によくするという手段は、今は残念ながらない。これ以上打つ手がない。」と本人とご主人に説明されました。そこまで聞いたAさんは、「入院して、ちょっとは食べれるよ

うになった。入院していればナースコールで助けてもらえる。どうしたらいいか、すぐに看護師さんにきける。息ができない、つらい。もう少し楽に息をしたい。ちょっとしゃべっただけで口がかわくし、かくかくする。もう、誰の世話もできない。自分のことができればいい・・・今はつらい話は無理です。先のことは考えられない。卒業式や入学式にこだわりすぎたのかなあ。もう少し早く入院していればここまで悪くならなかったかなあ。厳しい話は、私がいなくてくださいます。今はつらい話は無理です。もう少し調子のいいときに聞きたい」と話し、病室へ戻りたいと訴えました。

Aさんが病室へ戻ったあと、主治医からはご主人に、続けてこの先あまり時間が無いこと、できる治療がないことが伝えられました。聴いている私もつらくなるような内容でした。ご主人は涙を浮かべて、ときおり手で涙をぬぐいながら黙って聞いていました。そして主治医からは「残された時間、どのように過ごしたいですか。あと1か月くらいしか・・・そういうところまでできています。でも、できることはいくつかあると思う。家で過ごすことを考えることもできる」と、提案がありました。

ご主人は、「入院前は、家でほぼ寝ていました。家のことも自分と子供とでやっていました。ちょうど子供が春休みだったので、一緒にいました。学校が始まって、自分も仕事があるので、妻はひとりになってしまふ。緊急のとき、電話もできないだろうし。でも、本人にしたら家の方が気が楽かとは思ふ。でも、朝から夕方までひとりになるので・・・誰かに助けてほしいと思っ

ても、誰もいない。妻の実家も自分の実家も頼れない。妻の両親は二人とも癌。父親はひとり暮らしをしていて、この病院にお世話になっています。母親は乳がんで、県外（本人の弟宅）にいる。本人の妹はやっぱり県外で・・・」と切々と語られました。

今後の時間をどう過ごしたいかについては、「子供もいるし・・・本人の意見を聴いていないし。」「時間は、あまりないのですね。」「遠出とかできますか」との言葉がありました。考えを整理できないようでしたが、妻を思いやっていることが伝わってくる言葉でした。

最期のときが近づいてきて、その時までどう過ごしたいかを本人に決めてもらうことは、大切なことだと考えます。しかし、自分自身の人生があと残りわずかだということを受け入れることは、容易ではありません。このような場合に、援助関係における「自己決定の原則」をどのように考えたらよいか、私は悩みます。いくら経験を積んでいてもこの思いは常にもっています。闘病をあきらめていない患者さん、まだ治ることを期待している患者さんに「あなたの人生、最期はどうしたいですか」と投げかけることにはためらいがあります。自分で決めてもらうための選択肢の提示が必要ですが、どうしても明確に伝えることに戸惑いがちになります。

「あなたがどんな選択をしても、可能な限り最善のことをお手伝いさせてもらいたい」と伝えることで援助につなげているのが実際です。

この課題について、もう少し考えてみたいと思っています。（次号に続く）